

投稿 1

東南アジアとの関わりを 忘れた日本史

二階堂 玲太

桜も開花しました。

過日は「葉隠80号」（葉隠研究会編）をご惠贈下さりありがとうございました。隅々まで拝読しました。

先生の「『葉隠』『翁草』『甲子夜話』から読み解く大坂の陣」では千姫脱出が興味深く感じました。坂崎出羽守が明石全登と友達であったことも気に留めました。大坂の陣のあと明石全登の行方は不明とされています。大坂の陣はキリシタン大名達が徳川勢と戦った戦争でもありました。千姫はキリシタンだったのでしょうか。

先生の「豊臣秀頼薩摩逃亡説」で、「秀頼は逃亡しなかったものの、薩摩藩は大坂方の有能な士をごっそりスカウトして連れ帰ったのは間違いない」とあることで、その中に明石全登がいたとしても不思議ではありません。薩摩はキリスト教の国でもありました。薩摩の〇に十の紋章は、古代キリスト教の景教の影響だともいわれています。ザビエルが薩摩に上陸したのも景教の調査のためとも聞きました。カタリナ夫人のこともあります。

「カタリナ夫人（永俊尼）が鹿児島に来て、娘が藩主家久の側室となり、嫡男光久を産んでから、境遇が変わってくる」ということで、薩摩はカタリナ夫人によりキリスト教色が強くなったと推測しています。敗北した多くのキリシタン信者が薩摩、長崎のルートから東南アジアに向かったのでしょうか。

マカオの聖ポール天主堂の建築には、江戸時代のキリシタン追放で海を渡った日本人も携わった。壁面に刻まれた悪魔の像は徳川家康がモデルだったと、海外の話題というコラムで読みました。悪魔の像が家康の容貌だとしても、追放されたキリシタンたちばかりでなく、もともとマカオに在住していた日本人も建築に加わったと思います。明王朝のマカオはポルトガルの貿易拠点でしたから、日本武士がポルトガル人の傭兵として活躍していたでしょう。

東南アジアには沢山の日本人が居住していました。九州の大名たちは日本の東北よりもはるかにアジアの方がなじみ深かったでしょう。

それを日本の歴史は海で分けてしまい、国内だけに目を向けてしまいましたので、おかしなことになっています。大坂の陣も、徳川だの豊臣だのと騒いでいますが、本質はそうではないでしょう。海外利権の争奪戦（鎖国は貿易利益の独り占め）といったらわかりやすいのかもしれませんが。

この点から云えば、関ヶ原の戦いでの西軍総大将・毛利輝元も外交僧・安国寺惠瓊も国内にばかり目を向けています。秀吉が朝鮮に天皇の遷座を考えたことなどすっかり忘れています。いや、安国寺惠瓊が忘れたのではなく、歴史家が（書かずに庶民に）忘れさせようとしたのでしょうか。大坂の陣は、秀吉の流れを継いだ海外利権の争奪戦とした方が分かりやすいのですが、それでは鎖国体制の徳川幕府は困るでしょう。

杉谷昭氏の「近代天皇制の成立」で輪王寺宮の令旨をプロイセンを通じて公表しようとしたとありますが、会津藩はプロイセンに土地を売り軍費を賄おうとした直前に落城したのです。その後もプロイセンはカリフォルニアの若松コロニーへ、会津の人たちを入植させますが、会津とプロイセン（その後のドイツ）はどのような密約があったのでしょうか。ただ、会津カワイソウではなく、この辺りも知りたいものです。

東北は南朝の勢力がバカに出来ない（戊辰戦争の時、南朝銀判を発行したそうです）ので、輪王寺宮を東北の盟主とし、東北南朝の勢力をそごう（攪乱）としたという説もありますが、どうでしょうか。日本が連合軍の占領下にあったとき、熊沢天皇のことがばかばかしいこととして報道されましたが、笑い話ではなく、もしかしたらマッカーサーは日本の天皇制を架空なものとするためのリトマス紙（アドバルーン）だったかもしれません。明治天皇は自らは南朝であると宣言されたことであるし、明治時代からの天皇制が揺らいでいることを知っていたのでしょうか。

同封頂きました読賣新聞の切抜「幕府の呼称 揺らぐ概念」（平成26年8月20日）で、「頼幕府」と「安土幕府」は二重政権の時代だったという記事を読んで、秀吉が本能寺の変のあとに、頼で足利義昭を囲み豪商たちと信長を酒の肴にして会食しているわけがわかりました。信長が義昭を放逐したあと、安土政権が成立しても不確かな状況は続いていたというわけですか（秀吉政権が確立するとようやく義昭は将軍職を辞して、秀吉の一大名になりました）。

大坂の陣までは豊臣と徳川も二重政権の時代でした。慶長8年、家康が征夷大將軍になったとしてもその権威は自らの実力で確立しなければなかなかなかったわけですね。

先生のご健筆を祈ります。妄言多謝。